

咸宜園と天領日田—学びの町の原風景

はじめに—今なぜ「江戸」なのか

- ・江戸時代 265 年の「平和」
- ・世界が認めた江戸の文化

1 江戸時代の文化と「教育力」

江戸時代の日本は世界的にも高い教育水準をもっていた。これを支えたのが諸藩の藩校や私塾、寺子屋などであった。

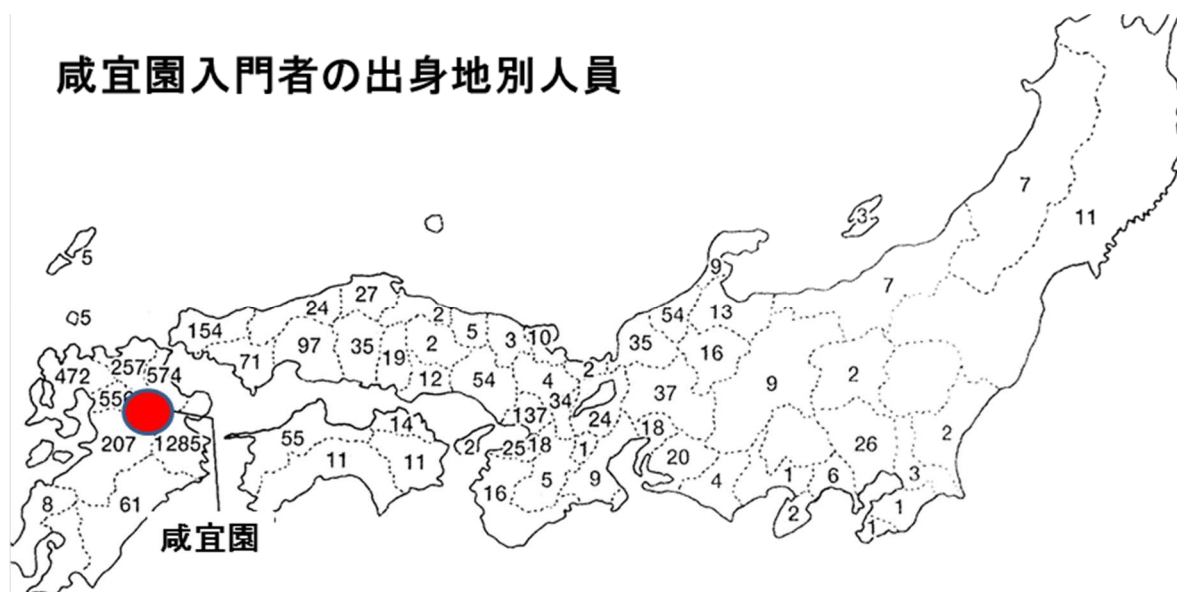
2015 年（平成 27）、茨城県水戸市の弘道館、栃木県足利市の足利学校、岡山県備前市の閑谷学校と日田の咸宜園で構成される「近世日本の教育遺産群」が「日本遺産」に選定された。

2 江戸時代の私塾—学ぶ自由と教える自由

江戸時代には約 3600 箇所の私塾が確認されている。私塾では教育の方法、入門・卒業等の進退は塾主と塾生の自由意志に任せられていた。

3 日本最大の私塾咸宜園

1817 年（文化 14）、広瀬淡窓が開いた私塾咸宜園には全国から延べ約 5000 人が入門、日本最大の私塾となった。咸宜園では身分・学歴・年齢を不問とする**三奪の法**や、月ごとに学習成績を評価する**月旦評**など斬新で特色ある教育が実践された。淡窓の生家広瀬家には咸宜園の**入門簿**約 4800 通が残されている。



4 咸宜園と「学びの町日田」

幕末の頃、豆田・隈の町はともに人口 1000 人余り。一方、咸宜園の入門者は 200 人を超え、その多くは他国（藩）からのいわば留学生であった。

日田の町の人々は物心両面で咸宜園と塾生たちを支援し、淡窓は豆田や隈の町に度々出かけて詩会や書会など出前授業を開いた。

日田の町は多くの留学生が学ぶ「**学園都市**」の様相を呈していた。

- ・青木美智男氏（元専修大学教授・日本近世史）
「豆田・隈町の繁栄、他国（藩）にない自由、文化の町の気風、山紫水明の美しい自然。一若者たちは「日田の咸宜園」をめざした」
- ・樺山紘（東京大学名誉教授・西洋史）
「日田では異文化を持つ入門者と土地の人が日常的にかかわり合っていた」
- ・大石 学氏（東京学芸大学名誉教授・日本近世史）
「日田には異文化を温かく受け入れる民度があった」。

5 淡窓・咸宜園の「放学・遊山」 一日田の野山に遊び学ぶ一

咸宜園ではしばしば「放学」して周辺の野山に出かけた。それは日田盆地全体を野外キャンパスとする教育といえるものであった。地域の住民はこの遊山を快く受け入れていた。



6. その詩文で読む淡窓の人間像（下記史料参照）

おわりに一淡窓にとっての「中央」と「地方」

史料 その詩文で読む淡窓の人間像

1、「哀」と「傷」と一亡き父母への思い（自伝『懐旧楼筆記』より）

淡窓の母ユイは文化9年（1812）、48歳で急逝した。ユイは15歳で広瀬家に嫁ぎ、長男淡窓はじめ八男三女を生んだ。淡窓は『懐旧楼筆記』の中で日田を代表する商家を内で支えつづけた母の労苦を追悼した上で、母があと三年も生きていれば、孫も生まれていた。生涯孫と云うものを知らずして逝ったことは遺憾の至りだったと述べている。

一方、淡窓の父三郎右衛門（桃秋）は84歳の天寿を全うした。淡窓はこの時は（母の時と違い）家運も上向き、家には子あり孫あり曾孫あり、嫁も何人もいた。孝養なお行き届かずとはいえ力を^{つく}盡すだけつくしたと述べている。

かくて淡窓はいう。「母の死には哀しみより傷み、父の死には哀しみはあったが傷むことはなかった」と。そして「考（父）が先で^{はは}妣（母）が従というのが儒教の教えの当然であるが、天寿を全うした父よりも、若くして逝った母を（より深く）傷むのは人情の^ひ必至である。その両者を並び重んじて憚ることはない」と。

2、雨上りの別れ（大分合同新聞コラム「灯」掲載の拙稿より）

嘉永六年（1853）、漢詩人として知られる河野^{てつとう}鉄兜が広瀬淡窓を訪ねた。鉄兜は当時大阪に住む淡窓の弟^{きよくそう}旭^{きよくそう}荘と親交があった。

鉄兜が見た淡窓の第一印象は瘦せて小柄、ただの一田舎老人という感じだったが、その言動には人を射る「英風」が感じられた。そしてどこまでも謙虚なのだが、それでいて、どこか、まわりを包み込む「気」を含んでいたという。このとき鉄兜はおよそ一カ月滞在した。

そしていよいよ別れの時、あいにくの雨模様の中、淡窓は病身にもかかわらず、きっちり^{はかま}袴を着けて玄関に立ち客人を見送った。そして涙を流して言った。

「老病千里ノ^{かくきよ}隔居、定メテ再会ノ期ナシ。前路、^{しぶん}斯文（学問）ノ為ニ自愛シ玉ヘカシ。」
—自分は老病の身とて、はるか千里の地に住む貴方に再び会うこともないでしょう。どうか学問の道のためにご自愛ください—と。

身に余る淡窓の厚情に感激した鉄兜は着衣の汚れるのもかまわず、雨上がりの泥中に^{ひざまず}跪いて謝意を表して旅立った。この時、鉄兜29歳、淡窓はその3年後、75才で亡くなった。

3、淡窓の詩一心と風景（「遠思楼詩鈔」）

桂林莊雜詠 諸生に示す より

休道他郷多苦辛	道 ^い うことを休めよ 他郷苦辛多しと
同袍有友自相親	同袍友有り 自ら相親しむ
柴扉暁出霜如雪	柴扉暁に出れば 霜雪の如し
君汲川流我拾薪	君は川流を汲め 我れ薪を拾わん

隈川雜詠 五首より

江上数峰如画屏	江上の数峰 画屏 ^{へい} の如く
家家争引入窓櫺	家家 争い引いて窓櫺 ^{れん} に入る
豪奴非惜千金価	豪奴 惜しむにあらず 千金の価
難買龜山半面青	買 ^い 難し 龜山半面の青

歳暮

残燈半壁明	燈は残りて 半壁明るく
人少閉連窓	人少なくして 連窓 閉じたり
書童還不眠	書童 還 ^ま た眠らず
相話故郷事	相い話す 故郷の事